Research Institute for World History

Newsletter

No. 6　October 2005

CONTENTS

1. 南塚信吾「世界史の研究と教育についてシドニーで思ったこと
—第 20 回国際歴史学会議参加記—」

2. 吉橋弘行「文献紹介 Kären Wigen, "Cartographies of Connection: Ocean Maps as Metaphors for Inter-Area History." in: Hanna Schnissler and Yasemin Nuhoğlu Soysal (eds.), The Nation, Europe, and the World. Textbooks and Curricula in Transition. Berghahn Books, New York/Oxford, 2005.)」

3. 鹿住大助「文献紹介　歴史学研究会編『歴史研究の現在と教科書問題—「つくる会」教科書を問う』、青木書店、2005 年」

4. Web 世界史「David Rumsey Historical Map Collection」

5. 世界史研究所からのお知らせ

http://www.npo-if.jp/riwh/

発行：NPO-IF 世界史研究所
千葉大学文学部史学科西洋史研究室

RIWH　npo-if

世界史研究所「ニューズレター」第6号　2005年10月

世界史の研究と教育についてシドニーで思ったこと
―第 20 回国際歴史学会議参加記―

南塚 信吾

去る７月３日から９日まで、オーストラリアのシドニーにおいて、第 20 回国際歴史学会議が開かれた。わたしが参加したいくつかのセッションで、Universal History, World History がさかんに話題になっていたので、それがいかに話題にされたかを紹介しておきたい。

開会式のあとのシンポジウムでは、J. コッカ会長は、グローバリゼーションに対応して、歴史学もテーマや視角の多様性にもかかわらず、グローバルな視野と意義を持たねばないと強調した。そのためには、①方法の一様性、②結論への意欲、③コンテクストと連関の強調が必要であり、特に③においてナショナルなアイデンティティが国際的な連関のなかで相対化されることに注意を喚起した。そしてこの様な歴史学は決してユートピアではなく、相互に関連した、しかし多様な、歴史を描くことができるのだと主張した。このコッカ会長の議論は、近年の歴史学のナショナルなレベルでの対立関係を念頭においたものと理解される。

これに対して、韓国の歴史家は、ネイション・ステイトは長く続くもので、歴史家の能力もしょせんナショナルな枠を抜け出ることはできない。結局、歴史家が団結して「歪曲」と戦うことが必要だと述べた。ここには近年の日本の歴史認識の問題が強く意識されていたように思われた。他方、セネガルの歴史家は、歴史学は国家権力からくる制約と地域共同体から来る制約と戦わねばならず、自己のコミュニティのメモリーと戦うと裏切り者とされる危険性さえ持っているとし、このような限界から抜け出すには、史料批判を含む歴史の方法を共通にすることしかありえないと述べて、大喝采を受けていた。

こうして、大会はその開会式からグローバルな歴史の構築の可能性を意識したものになっていた。

西川正雄氏が主催された「歴史教育セッション」でも、グローバルな歴史学ということが問題になった。それは、現在の歴史教育問題は、19 世紀のナショナルなヒストリーの影響を強く受けて生じたものであり、それを相対化する視点として、19 世紀のナショナル・ヒストリーの生れる前の、啓蒙主義時代のワールド・ヒストリーとそれを支えていたコスモポリタニズムに注目するという脈絡で出てきていた。実は、この啓蒙主義への関心は、現実に研究のうえで表れていたのである。

翌日、マックアイア大学でのラウンド・テーブル「世界史の国際化」に参加した。これは国際歴史学会議とは直接の関係はないが、その機会を利用して開催されたものであった。

ラウンド･テーブルは二部に分かれていて、前半はマックアイア大学の大学院生や若手研究者の発表で、後半は世界史の観点をいかに国際的に広げていくべきかという討論であった。

前半では、若手の研究者が世界史研究として扱っているテーマが多様であることを知らされた。たとえば、環境や自然と人間との関係の見直し、大西洋史、太平洋史、ジェノサイドやテロを視野に入れた平和論の再検討、啓蒙主義時代の歴史哲学の見直し、「原住民からの世界史」などがテーマとして紹介された。啓蒙主義時代の歴史哲学のなかでは、ヘルダーやカントなどへの関心が新たに高まっているようである。方法的には､世界史研究はディシプリンが多様であることによる困難が強調されたが、同時にこれはヒューマニティを救うための挑戦でもあるとか、未来への貢献であるという意見も示され、意気込みを感じさせられた。

後半では、世界史の研究教育のネットワークを作り上げる必要性が強調され、世界史研究者は孤立していてはだめだと反省が促された（P. マニング）。また、ライプツィッヒ大学から来た歴史家は、ヨーロッパでの世界史研究がヘーゲル、マルクス、シュペングラーに立ち返っていることを紹介していた。そのほか、Journal of World History、や World History Association などの紹介が行われた。日本からは、伊集院氏が、世界史史料集の編集が進んでいることを紹介され、南塚が世界史研究所の活動の紹介、日本での世界史講座、世界史教科書、日東西洋の関係、国際関係史の意義などを紹介した。また大阪大学の秋田氏は、同大での Creation of Global

History from Asian Point of View という企画の紹介をされた。

南塚の発言をまとめておくと、

1）日本の歴史教育において日本史・東洋史・西洋史が分割されしかも階層的な意味を持たされてきたこと。

2）そのために世界史という認識は成立しにくく、しいて言えば、国際関係史という分野でそれが維持されてきたこと。

3）それでも、戦後において、世界史の「講座」が次々と刊行され、教科書においても世界史は重要な位置を占めてきていること。

4）歴史研究者はそれぞれにおいて世界史を目指しているが、直接的にはそれを業績にはせず、だれかが取りまとめてくれると考えがちであること。

5）そういう中で、世界史研究所の設立の意義があること。

6）ただし、世界史研究所も物的・人的制約のため、まだ十分な研究成果は挙げられていないこと。現在はウェブサイトの維持の他、世界史キャラバンやマニング教授の本の翻訳やいくつかの懇話会の組織が精一杯であること。

7）しかし、江口朴郎先生のお仕事など、日本での世界史論を国外に発信する必要があると考えていること。

などであった。

ラウンド・テーブルの後の懇親会では、世界史研究所が話題の中心になり、とくに「エグチ」の仕事を紹介してほしいとの要請を強く受けた。また、日本の各大学における世界史教育・研究を総合するような機会をつくる必要も示唆された。世界史研究とその教育のためになすべき多くの課題を痛感させられたしだいである。

（2005 年 7 月）

文献紹介

Kären Wigen, "Cartographies of Connection: Ocean Maps as Metaphors for Inter-Area History." in: Hanna Schnissler and Yasemin Nuhoğlu Soysal (eds.), *The Nation, Europe, and the World. Textbooks and Curricula in Transition*. Berghahn Books, New York/Oxford, 2005.

吉橋 弘行

前号では当研究所の木村英明氏が Geyer の議論を紹介した。今号はその Geyer の論文が収められている上掲書の中から、Kären Wigen の論文を紹介する。なお、同書全体の要約についてはすでに前号において木村氏が行っているため、ここでは割愛する。

最初に著者の Kären Wigen を簡単に紹介しておきたい。Wigen は日本近世史を専門とする研究者であり、現在、スタンフォード大学歴史学部において助教授として教鞭をとっている。具体的な研究内容をみてみると、例えば 1995 年に刊行された彼女の著作 *The Making of a Japanese Periphery, 1750-1920*（University of California Press, 1995）[1] では、日本の工業化の初期段階における地理を分析している。またフォード財団の後援の下、Martin Lewis とともに地域研究の再検討のためのイニシアティヴとして "Ocean Connect" というプロジェクトをデューク大学において立ち上げており、*The Myth of Continents: A critique of Metageography*（California, 1997）の執筆にも参加している。なお現在は日本列島における登山と高山風景の鑑賞の歴史に焦点をあてて研究しているという（Ibid., pp. 250-251.）。

次に、Wigen の議論を概観していきたい。

1．Inter-area history

Wigen は現在の英語圏の歴史研究において大きな変化が生じていると述べている。従来、多くの英語圏の歴史

家は安定したナショナルな中心（stable national cores）を研究していた。しかし現在では流動的で周縁的な事象が扱われるようになり、ひと、思想、貨幣、社会運動などのグローバルな動きをテーマとして扱う研究者が増加している。Wigen によれば、こうした現象には「トランスナショナルな地理学 transnational geography」が共通してみられるという。もはや一つの国家領域内の研究では十分ではない。また多くの場合、地域研究にみられるマクロな地域さえも越えるようになっている。

こうしたことから Wigen は、「inter-area history」と呼びうる、新しい研究分野が構築されたとしている。この「inter-area history」とは知的装置や教育における単位となっていた地域や国家など、従来の学問分野における基本的カテゴリーを根本から動揺させており、これまでの地理学のあり方を問う対話を生み出すものであるという。

このような考え方から出発する Wigen は、これまでの地理学の再検討を行なっている。その結果、近代初期における世界の海洋図の作成に注目するようになった。15 世紀末以後、ヨーロッパではそれまでの海図に記載されていなかった海洋を海図に描き始める作業が行われた。しかし境界を持ち、他と異なる領域に区分することによって海洋を地理的に位置づける作業は困難を極めることになった。このような問題に対して Wigen は、今日のトランスナショナルな歴史と関連付けて分析しようとする。すなわち、トランスナショナルな現象と同様にボーダーレスな領域を扱っていた近代初期の海洋学は、今日の「inter-area history」に役立つというのである。

このような問題関心から Wigen は、1450 年から 1950 年までの 500 年間に西洋の海洋図作成においてみられた「national sea」、「maritime arc」、「bounded basin」、「a single global ocean」という 4 つのモデルを取り上げている。Wigen によれば、これら 4 つのモデルは「inter-area history」にみられる特殊なパラダイムにとって有益なメタファーとなりえるという。以下、これらのモデルに対する Wigen の議論をそれぞれ概観していきたい。

（1）National Seas

近代初期のヨーロッパの地図作成者が海洋空間を把握するために最初に行なったことは、それを「national sea」に切り分けていくことであった。彼らは海洋空間をナショナルな領土の拡張と考えており、ヨーロッパのナショナルな要求を敷衍していたのである。

Wigen によれば、このような現象は外交史と帝国史に関する inter-area の研究にとって有益なメタファーとして役立つ。なぜなら、それらにおいてもトランスナショナルな空間に対するナショナルな要求がみられるからである。

このモデルに限界があることは明らかであり、近年では従来の帝国史や外交史に基づいた歴史叙述を超越する必要性が唱えられている。しかし Wigen は、世界を「national sea」と理解したことに意義があると考える。すなわち、このことによってナショナルな歴史家がトランスナショナルな問題に注目していったというのである。例えばイギリス史では、近年、大英帝国よりも「imperial Britain」に対する関心が生じており、帝国史を本国に還元することによって本国でどのような展開が生じたかが研究されるようになっている。

このような傾向は東アジア史においてもみられるという。近年、中国、朝鮮、日本の歴史研究では外交史と帝国史研究の見直しが進行しており、周辺ではなく、国家の合法性や「国家を復活させる（bringing the state back in）」ことに関心が集中している。例えば江戸時代と清王朝の研究者はネイション・ステイトの歴史に「世界」を再び持ち込むようになり、東アジアの相互関係の重視によって従来の見解を再編し始めている。

（2）Ocean Arcs

啓蒙主義の時代、フランスの地図作成者たちは「ocean arc」という新しいモデルを開発した。それは大陸の周囲や大陸間に細長いリボン状の海域を設定し、そこに national sea を組み込むというものである。この結果、ローカルな海域が ocean arc に編入される二層構造が生み出された。しかしこれらの設定基準は必ずしも明確ではなく、帆船の時代における貿易路を示す程度のものでしかなかった。こうした事情もあって ocean arc は間もなくヨーロッパの地図から消滅し、その存在自体も忘れ去られてしまうことになる。

この ocean arc に対して Wigen は、広大な海域において「諸地域」が区別され、それらの交流路が示されていたことに注目している。すなわち、ocean arc にみられた識別能力が今日の inter-area history、つまりトランスナショナルなネットワークの研究にも存在しており、ネットワークを研究する今日の歴史家は、近代初期の地図作成者と同様に相互交流の地理学から出発し、歴史的な人間のつながりに基づいて地域を設定しているという。

特に Wigen は、今日のトランスナショナルなネットワークの中でディアスポラに注目している。ディアスポラの知識人が歴史研究に新領域を確立したと考える Wigen は、このアプローチが方法論的に新しいものであり、相互交流にみられる独特なパターンの研究のために従来の境界を越えて研究分野をアド・ホックに設定することができると述べている。

（3）Ocean Basins

次に Wigen が取り上げているのは、20 世紀に national sea と ocean arcs に取って代わることになる第 3 のパラダイム、「ocean basin」である。

Wigen によれば、大西洋、太平洋、インド洋という 3 つの「真の」大洋は、1950 年代までにはたいていの地図や地理の教科書で承認されるようになった。しかしそれらの名称は少なくともヨーロッパでは 1400 年代に遡るという。今日の名称が新しいのは、その配置にある。すなわち、現在では大洋は national sea および ocean arc と空間を共有するものではなく、海岸線に至るものとされており、多くの箇所で周囲の陸塊に接する、広大で境界を持つ水域と定義されるようになったからである。

ocean basin において Wigen が着目したのは、それが海上においてすき間の通行空間（interstitial spaces of passage）を固有の名称をもつ自立的な場とする機能を持っていたことであり、そのような空間に他と異なるアイデンティティが付与されたことであった。Wigen はこのアプローチでは文化交流などが行なわれたすき間の場（interstitial places）が重要であり、ocean basin のモデルが inter-area の研究、つまりコンタクト・ゾーンや国境、境界地の研究に対する第 3 のメタファーとして役立つと述べている。

（4）The Global Ocean

inter-area 研究に対する最後のメタファーとして Wigen が取り上げているのは global ocean である。このアプローチでは national sea、ocean arcs、ocean basin が単一の global ocean に包摂される。従って大西洋、太平洋、インド洋も 1 つの海の巨大な湾に過ぎないことになる。Wigen は、このような単一の海洋というヴィジョンがトランスナショナルな歴史における第 4 のパラダイム、すなわちグローバル・アプローチに対するメタファーとして役立つとしている。

これまでみてきたように 1492 年以後の地図作成者たちは 4 つのパースペクティヴから海洋空間を概念化した。これに対して Wigen は、今日の歴史家も近代初期の地図作成者と同様に、inter-area のつながりに対して近代初期の地図作成者の 4 つのパースペクティヴに対応する 4 つの方法でアプローチしていると述べている。それらは第 1 にナショナル・ヒストリーの拡張、第 2 にトランスナショナルなネットワークの介在、第 3 にコンタクト・ゾーンに焦点を合わせること、そして第 4 にグローバルな流れ、あるいはプロセスの分析である。これらのアプローチはそのどれかが他に対して特権化されることはない。それぞれのアプローチは inter-area history に対して異なるメタ地理学を生成しており、その結果、サブフィールドの編成に対する 4 つの競合的モデルとなっているのである。

2．学生に世界をもたらすこと

Wigen は inter-area のパースペクティヴを教育に適用することについても言及している。その 1 つの方法は、inter-area のパースペクティブをナショナル・ヒストリーの調査に組み込むことである。近年、アメリカではこの教育が実際に行なわれるようになっている。

この分野に関する文献の中で Wigen が特に注目しているのは、Jeremy Black が編纂し、2000 年に刊行された *DK Atlas of World History* である [2]。Wigen によれば、この著作で扱われている諸テーマは inter-area history の様々なパラダイムと密接に一致している。例えば、人々、言語、宗教などのトランスナショナルな流れ、商業と社会のネットワーク、大洋を横断するディアスポラなどが取り上げられており、従来の地図と比較すると戦争や地政学への偏りが減少する一方、経済的・社会的・文化的な展開については拡充されている。Wigen はこの著作が世界史の授業だけではなく、地域史の位置づけにも有効になりえると述べている。

3．結論

近年の inter-area history への転回が歴史の実践に挑戦するようになったのは、Wigen によれば不可避の出来事であった。このことを Wigen は、Jeff Wasserstrom [3] の言葉を用いて、歴史家がますます「グローバルに読解し（read globally）」、「ローカルに叙述する（write locally）」を望むようになっていると述べている。

さらに Wigen は、地域を研究に取り込むために inter-area の研究プロジェクトにおいて場が多くの異なるパースペクティヴから批判的に分析されなければならないと

する。すなわち､「世界の地域（world regions)」とは「地域からなる世界（regional world)」であり、ローカルな人々が彼ら固有の世界観を表明する場だというのである。ここで言う「地域」とは単に知の産出の対象ではなく、積極的な参加者である。そして Wigen は、これらの実現には地域の歴史研究において共同作業が必要となる可能性があると述べている。

最後に Wigen は包括的な世界史の構築の問題を論じている。これに対する Wigen の提案は、一つの現象に対して「ローカルな」歴史家によるミクロな研究と「グローバルな」歴史家の研究、すなわち、異なるスケールからのパースペクティヴが必要であり、そして「全ての」地域の専門家がその議論に参加しなければならないと述べてこの論考を結んでいる。

注）

[1] この著作は、邦訳が刊行される予定である。http://www.fcronos.gsec.keio.ac.jp/inasousho.html を参照。

[2] Jeremy Black, *Atlas of World History*, DK Publishing, 2000（邦訳は、ジェレミー･ブラック『世界史アトラス』集英社、2001 年）. また最近では、Jeremy Black, *World History Atlas*, DK Publishing, 2005.

[3] Jeff Wasserstrom, "Eurocentrism and its discontents." *Perspective Online*, January 2001, www.theaha.org/pespectives.

文献紹介　歴史学研究会編『歴史研究の現在と教科書問題―「つくる会」教科書を問う』、青木書店、2005 年。

鹿住 大助

本書は、今年新版が検定を通過した『新しい歴史教科書』(扶桑社発行) の記述に対して、歴史研究者の側からその問題点を指摘したものである。2001 年に「つくる会」が編集した『新しい歴史教科書』は、明らかな誤りを含みながらも教科書検定を通過し、アジア諸国からの非難を受けて当時から各種メディアで取り上げられるとともに、歴史研究者側からの批判を受けてきた。新版においては、2001 年版の記述に見られた明らかな事実誤認の多くは修正されたものの、「つくる会」が主張する「日本人の誇り」を取り戻すための歴史教育という歪んだ認識と、それを受けた教科書上の記述は修正されなかった。結局、今年の『新しい歴史教科書』の採択率は 1% 以下と低調だったものの、「戦後 60 年」「拉致問題」「靖国問題」といった単語を用いながら「国家・国益」ばかりに焦点を当てた論調が氾濫する中で、『新しい歴史教科書』は「日本人の誇り」を歪んだ形で再生産する一翼を担った。

本書は、『新しい歴史教科書』の事実誤認を指摘するよりも、「この教科書の歴史叙述に潜む問題点を浮かび上がらせる」と同時に、「歴史研究の現状を再認識すること」を課題としている（p.2)。これまで蓄積されてきた歴史学の研究成果をふまえずに、都合の良い事実と解釈のみを列挙することで構成された「物語」という『新しい歴史教科書』の性格は 2001 年版と同じである。他方で、大学改革などによる歴史研究の場の消失と歴史叙述に対する不信感は、歴史研究を取り巻く現状をより困難なものにしつつある。「歴史叙述に対する不信感」とは、第一に「左翼 (旧社会党や日教組、朝日新聞) による自虐史観の流布」「中国・韓国の反日運動の背景にある反日歴史教育」といった言説が「つくる会」だけではなく様々なメディアから流布されたこと、第二に言説の流布と相まって「自分たちにとって都合の良い事実と解釈の列挙によって歴史は構成されうる」というかたちで従来の歴史叙述に対する不信と批判が形成されたことを意味する。不信と批判の対象は日本の「自虐史観」や中国・韓国の「愛国主義歴史教育」であるが、こうした不信と批判は「都合の良い事実と解釈の列挙」を通じた日本の過去の正当化へと容易に転化した。従来の日本やアジア

諸国の教科書にみられた歴史叙述を「物語」として扱うことで、逆に「つくる会」の「物語」を正当化したのである。既存のメディアによる報道や出版、およびインターネット上の言説を見れば、こうした傾向は明らかであろう。

不信感は歴史学研究の場においては、「言語論的転回」を受けて、日本の「戦後歴史学」の「実証主義」批判として現れてきている。そこで「戦後歴史学」の総本山として批判の槍玉にあげられるのが、本書を編集した歴史学研究会である。もちろん、批判言説に見られる「戦後歴史学」や「実証主義」といった単語は実態として何を意味するのか曖昧なままに用いられており、「歴史学研究会」にいたっては誰がその集団を構成し、「戦後歴史学」の論調をどのように代表してきたのか全く明らかではない。それでも近年では、「従軍慰安婦論争」や慰安婦として強制連行された人物の「証言」の取り扱い、歴史の「語り」など、結論はまだ見えないままであるが歴史研究のあり方をめぐる議論がなされてきた。

本書が課題とする「歴史研究の現状を再認識すること」とは、こうした歴史研究を取り巻く状況をふまえた上で、これまで資料全体の正確な読解と史実の妥当性の追求に基づく歴史叙述、そしてその叙述をめぐる研究者間での討論という歴史家に必須の営みによって蓄積されてきた研究成果を再確認することである。「歴史学研究会」とは、「実証主義」歴史家の単なる集まりではなく、研究者間の討論の場であり、「歴史学研究会」が「つくる会」の教科書を取り上げるということは、この討論の場において歴史叙述をめぐる論争を行うことであると考える。その上で、本書の各章を執筆した歴史研究者が明らかにしたことは、『新しい歴史教科書』の叙述がいかに論争に耐えられないものであるかということであり、同教科書が歴史研究の成果を反映していない教科書であるということである。(個別具体的な論証は各章を参照されたい。)

以下、『新しい歴史教科書』の教科書としての問題性についての本書の指摘をまとめて、文献紹介に代える。本書では「つくる会」の教科書の叙述を、古代、中世、近世、近現代の大きく四つに分けて検討し、特に問題の多い近現代については地域史やジェンダー史、世界史などの見地から具体的な検証を行っている。歴史学研究会委員会による「近現代総論」においては、『新しい歴史教科書』が特に天皇制・植民地支配・ジェンダーの三点において、秩序のあり方をめぐって、都合の悪い事実を無視しながら戦前の美化や日本の「伝統」を強調するという独特の手法を展開していることが指摘される。さらに、こうして描かれた歪んだ歴史を、血のつながった先祖の歴史として生徒に学ばせることで、教科書に描かれた歴史があたかも「自分」や「われわれ」の歴史であるかのように認識させる手法をとる。「血筋」に訴えかけた「閉鎖的」歴史叙述であり、生徒は自己中心的な「われわれ」の視点でしか歴史を理解することができず、本書の多くの執筆者や、南塚信吾氏が指摘するとおり「国際的な視野」は同教科書を通じて養われることはない。また「われわれ」の中にある性差、社会階層なども同教科書において顧みられることはない(若桑、金原)。最終章で土屋武志氏は、「教科書から欠落させてはならない『ツール』」として多様な「他者」の情報を取り入れた教科書、子供たちに「他者」との関係の中で歴史を考えさえ行動力を育てる教科書、そしてそれが人命軽視や独裁者創出につながらないことが求められていると主張する。『新しい歴史教科書』は、生徒に自己中心的視点を植え付けると同時に「他者」を認識しようとしない狭い感覚を養成するのである。

Web 世界史

毎回 Web や CD-ROM など電子化された世界史研究情報を紹介していきます。
世界史研究所のウェブサイトにもここで紹介したものを掲載しています。

David Rumsey Historical Map Collection

http://www.davidrumsey.com/

▲「David Rumsey Historical Map Collection」
http://www.davidrumsey.com/

今回紹介するのは、18 世紀から 19 世紀にかけての地図を集めたウェブサイトです。このサイトはアメリカの実業家デヴィッド・ラムゼイ（David Rumsey）氏による古地図の個人コレクションを、電子化してインターネット上で公開したものです。氏が 20 年前から収集し始めた世界各地の地図約 12,600 点（2005 年 10 月現在）が展示されており、高解像度（300ppi 以上）でスキャニングされた地図をブラウザ上で拡大表示して閲覧することができます。

このプロジェクトには米国国会図書館も参加するほか、現在ではカリフォルニア大学バークレイ校のオンライン・カタログ（http://sunsite5.berkeley.edu:8000/）の検索結果とも連動しています。

地図の電子化プロジェクトは 1997 年から始まり、図像の電子化・インターネット上での公開技術を保有するルナ・イメージング社（http://www.lunaimaging.com/）との協力のもと、地図のデータベースが作成されるとともに電子化・オンライン上で公開され、閲覧者がブラウザ上で地図を検索したり、拡大・移動したりすることができるようになりました。（商用でなければ同サイトから地図をダウンロードして利用することも可能です。）

地図の検索はページ中央にある「Insight Browser」や「Insight Java Client」をクリックすると別画面が表示され、国や地域、地図の制作者の名前、その他関連キーワードで検索できます。検索結果は地図画像の一覧で表示され、興味のあるものをダブルクリックすると地図が表示されます。地図の右下にある各種ツールボタンを使うことで、拡大・縮小や印刷などを行えます。

▲地図の画像表示画面。右下に拡大・縮小などのツールボックスがある。

2001 年からはさらに GIS（Geographic Information System）とよばれるシステムを導入し、古地図の上に街路や河川などの情報を表示することができるようになったほか、年代ごとの地図を重ね合わせて表示できるようになりました。地図の年代を切り替えることで、都市がどのように変化してきたのかを知ることが可能です。現在、GIS で閲覧できる地図はニュー・ヨークやワシントンなどアメリカの主要都市のみに限られていますが、今後さらに追加される予定です。

なお、同ウェブサイト内には、カリフォルニア大学が所有する日本の古地図、約 2,300 点を閲覧できるページもあります。（「Japanese Historical Maps」http://www.davidrumsey.com/japan/）これもラムゼイ氏のコレクションと同様にブラウザ上で閲覧できます。

研究者にとって有用であるだけでなく、教育の現場でも活用できるウェブサイトだと思います。

世界史研究所からのお知らせ

研究会「戦後派第一世代の歴史研究者は 21 世紀に何をなすべきか」（略称「戦後派研究会」）発足

2005 年 7 月、上記の研究会が発足しました。世界史研究所では、同研究会を全面的に応援することにしています。具体的には、会場の提供、会議上の諸便宜の供与、またホームページでの案内などを行います。

同研究会の設立趣旨は、以下のとおりです。

研究会の参加者は、伊集院立・伊藤定良・加納 格・木畑洋一・小谷汪之・清水 透・高橋孝助・富永智津子・藤田 進・古田元夫・増谷英樹・南塚信吾・宮地正人・山本真鳥・油井大三郎・渡辺 勲（事務局）（以上、アイウエオ順）です。

なお研究会の事務局からは、随時「会報」が発行されますが、それも世界史研究所ウェブサイト内の「戦後派研究会」ホームページに掲載することにしています。

設立趣旨

1990 年前後の東欧社会主義圏とそれに引き続くソ連邦の崩壊は、アメリカの単独覇権主義の横行に道を開く国際政治上の大転換であっただけではなく、私たちの世界史認識の根底を揺り動かす大変動でした。それは、人類の歴史を全体として大きく捉えようとする志向性を弱める方向に作用し、世界中で偏狭なナショナリズムに基づく歴史観の跋扈を許すことになりました。

その日本における一つの大きな現れとして、ますます激しくなる歴史教育に対する右翼的攻勢があります。第二次世界大戦中に日本が犯した戦争犯罪を隠蔽し、日本の近代をサクセス・ストーリーとして描き出そうとする動きが、いまや、極端な域にまで達しつつあります。学校教育の現場に対する、日の丸掲揚、君が代斉唱などの強制は、自殺者を出すまでになっています。

私たちは、知的には、いわば純粋の戦後派第一世代といっていいと思いますが、別に誰かに教え込まれたり、教育されたということではなく、日本社会や世界全体の雰囲気の中で、固有の「教養」（culture）を身に付けてきたといってもいいでしょう。それは、人類を意識しつつ、人間の平等と「市民的自由」を尊重し、あらゆる権力の横暴を拒否する姿勢であります。

しかし、現在の日本の状況を見ますと、このようないわば「戦後民主主義」的な「教養」(culture) が力を失いつつあるようにも見えます。それは、単に日本社会の全体的な右傾化によることなのか、それとも、「戦後民主主義的」な「教養」そのもののなかに、ある種のひ弱さが本質的に内在していたのか、改めて考え直してみる必要がありそうです。

それを、より具体的に、世界史認識の問題に即していえば、マルクス主義的な世界史認識のみならず、「市民主義」的な世界史認識の大枠すら崩れてしまったかに見える状況において、偏狭なナショナリズムに流されない人類的視点にたった世界史をどう再構築しうるかという課題に迫られているということでしょう。

私たちが直面している課題はあまりにも重いというほかありませんが、戦後の知的風土の恩恵をこうむってきた世代の者としては、それを乗り越える方向を模索する責務を負っているのではないでしょうか。その責務を果たすべく、研究会「戦後派第一世代の歴史研究者は 21 世紀に何をなすべきか」を立ち上げたいと思います。

2005 年 7 月

NPO-IF 世界史研究所

〒 150-0002　東京都渋谷区渋谷 2-17-3　渋谷アイビスビル 8F　TEL：03-3400-1216　FAX：03-3400-1217
E-mail：world_history@npo-if.jp　URL：http://www.npo-if.jp/riwh/